アンジェスMG

2002年9月、「遺伝子のグローバル・リーディングカンパニー」を目指すアンジェスMGは創薬系バイオベンチャーとして日本で始めてマザーズに上場した。アンジェスMGは、2002年3月に第1回日本バイオベンチャー大賞を受賞するなど、日本のバイオベンチャーの雄という評価を得ていた。マスコミにも数多く取り上げられ、バイオ産業育成のために政府に意見を求められるなど、大きな注目を浴びていた[1]。

1999年12月に設立されたアンジェスMGは、創業者である森下竜一大阪大学教授の研究成果に基づき、HGF（Hepatocyte Growth Factor：肝細胞増殖因子）による遺伝子治療薬の研究開発を進めている。HGFは、血管の形成を促す働き（血管新生作用）を持つタンパク質の遺伝子である。その医薬品は、閉塞性動脈硬化症や心筋こうそくの治療薬として期待されている。

2001年と2002年には、HGF遺伝子治療薬の販売について第一製薬と提携を結んだ。第一製薬が、末梢性血管疾患（閉塞性動脈硬化症やバージャー病等）および虚血性心疾患（狭心症、心筋こうそく等）の治療薬として日米欧で独占的に販売する権利を得る見返りとして、アンジェスMGに対して研究開発への資金援助を行うことになった。製品化は2005年以降と考えられている。市場に出した（上市）後には、販売額に応じたロイヤルティ収入がアンジェスMGに支払われる。

日本におけるバイオベンチャー企業の現状

アンジェスMGが大手製薬企業との提携を結び、上場を果たしたことは、日本のバイオベンチャーの中では突出した成功といえる。しかし、世界的に見れば、ありふれた出来事ともいえる。

このケースは慶應義塾大学経営管理研究科助教授中村 洋がクラス討議の資料として作成したものであり、経営状況の適否を例示しようとするものではない。（2003年2月）

1　例えば、厚生労働省による「医薬品産業ビジョンに関する懇談会」（2002年5月）。